

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成果報告書

平成26年 6月 1日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科

職名・学年 博士後期課程3年

氏 名 辻 田 明 子

助成の種類	平成24年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 在外研究長期助成		
研究課題名	古代メソポタミアのニサバ女神(穀物と書記の神)の体系的研究		
受入機関	ライデン大学 (オランダ)		
渡航期間	平成 25年 4月 1日 ~ 平成 26年 3月 31日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	2,500,000円	
	使用した助成金額	2,500,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	渡航関連費(航空券等)	100,000円
		ビザ関連費	50,000円
滞在費		2,350,000円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 滞在関連費への使用が認められていること、英文証明書発行に柔軟に対応していただいたことに特に感謝しております。		

## 成果の概要

研究題目：古代メソポタミアのニサバ女神(穀物と書記の神)の体系的研究

辻田明子

### 1. はじめに

本報告書は、京都大学教育研究振興財団より若手研究者在外研究支援（長期助成）を受け、ライデン大学（オランダ）で行った一年間の研究をまとめたものである。

### 2. 研究課題

古代メソポタミアは多神教世界であり、その精神文化の理解には、個々の神々に関する考察を欠かせない。メソポタミアではまた、灌漑農業とその技術革新によって穀物増産が実現した。そしてこれによって生じた余剰の分配のために公共組織が整備された。さらに、そうした組織の管理と運営のために書記術が生まれた。すなわち、穀物と書記術はこの文明の核ともいうべきものであり、この点で、メソポタミアの数ある神々のなかで、ニサバ女神は注目に値する。本研究は、穀物と書記術という、古代メソポタミア文明の根幹にかかわる要素を司ったニサバ女神に関する、世界で最初の専論である。

ニサバ女神は、本来メソポタミアの穀物生産を司る神であったと理解されてきた。紀元前3千年紀半ば以降は書記とその技術の神として、書記の仕事である計算・測量・通訳などを守護し、「知恵」を授ける神にもなった。穀物・農耕とのかかわりゆえか、星辰の動きや世界と人類の「運命」も取り仕切った。ニサバ女神はメソポタミアの歴史を通して崇拝され続けたが、その役割は時代を経るごとに変化した。それは、この女神が月や太陽などの自然物ではなく、人間生活に密着した文化的な要素を守護したことに起因する。

このように興味深いテーマにかかわり、関連史料が多いにもかかわらず、最高位の神々のグループに属していないため、ニサバ女神に関しては専論がなかった。本研究では、ニサバ女神に対する崇拝の歴史を詳らかにし、ニサバを軸に古代メソポタミアの精神文化の展望を目指す。

### 3. 研究成果

1) 個人名にみるニサバ女神崇拝の地域的広がり と 歴史的推移：先行研究の理解と文学テクストの記述から、ニサバ女神崇拝の歴史的変遷を以下のように大きく4つに画期した。

区分	年代	地域	ニサバ女神の地位と主たる役割
第1期	前3千年紀半ば	シュメール	高位の神／書記(術)の神*
第2期	前3千年紀末～ 前2千年紀初め	シュメールか らバビロニア へ	中級の神／書記(術)の神、知恵の神、穀物の神*
第3期	前2千年紀半ば	バビロニア	徐々に地位低下／書記(術)の神*、知恵の神、穀物の神
第4期	前2千年紀半ば以 降	バビロニア アッシリア	地位は低い*／穀物の神、知恵の神

注：\*は、なお検討の余地があることを示す

これまでに出版された資料から、ニサバの神名を含む、古代メソポタミアの人名を収集した。そして、人名とニサバ女神への崇拝に何らかの連関が存在する可能性を想定し、事例を分析した。

ニサバの名を含む個人名は、前3千年紀半ばにはシュメール語名に限られるが、前3千年紀末にはアッカド語名も見られるようになり、種類も多様化する。出土地もシュメール地方からバビロニア全域へと広がる。しかし前2千年紀半ばになると、シュメール語名・アッカド語名ともに見られるものの、数も種類もごく限られたものとなる。すなわち、ニサバ女神の名を含む人名の通時的な発展や地域的な広がり、ニサバ女神への崇拝の画期に概ね対応することが明らかになった。

**2) ニサバの本来の姿と語源論争の決着：**ニサバ女神の名前は NAGA（以下ナガ）という音の楔形文字で表される。このナガは従来、アルカリ植物であると考えられてきた。アルカリ分を多く含むその灰が、西アジアで発明された石鹼の材料に使われたというのである。報告者はしかし、ナガがアルカリ植物でも石鹼の材料でもないことを示した。そしてナガが、おそらくセリ科植物であり、その種子と芳香が重用され、対象を清める効能が信じられた可能性を指摘した。また、ニサバが本来はナガ植物の化身たる清めの女神で、穀物神としての性質はのちに付加されたことも示した。ナガ植物は、織物業、皮革業、冶金業にも使用されていたから、本成果によって、これら産業に関連する史料の新解釈も期待される。

またニサバの語源は、先行研究ではシュメール語で解釈され、nin(女主人)+sab(a)の2語から成ると理解されてきた。sab(a)の解釈をめぐるのは、地名あるいは、割当て穀物など、数説ある。報告者は、この名の語源をシュメール語でもアッカド語でも解釈できないことを示した。ニサバ女神の読みには、文字発明以前に南メソポタミアに居住していた民族の言葉に由来する可能性と、シュメール語本来の読み方が失われた結果、セム人による音声解釈のみ残された可能性とがある。

**3) ニサバとナニブガル女神：**ニサバ女神への崇拝は長期にわたるため、類似した性格を持つ他の神と同一視されたり、逆にニサバ女神の異名が独立した神格の名前として扱われるなどの現象が起きた。それら数柱の神々のうち、まずナニブガル女神のニサバ女神とのかかわりを調査した。ナニブガル女神は名前の綴りにナガの字を含むため、ニサバとの連想が生じ、二神の同一視へと発展したらしい。ナニブガル女神の名前には、AN.AN.NAGA と (AN.)AN.NAGA.GAL の2通りの綴り方があるが、本来は互いに異なる二柱の神であったらしい。報告者はこれら二神とニサバの関係の推移を検証し、古代の書記の間にも3つの神名をめぐる混乱と混同があった可能性を指摘した。

#### 4. おわりに

本研究成果は、報告者の博士論文の一部をなすものである。日本には所蔵のない貴重な文献に多くあたり、当初の期待以上に広く深く研究を遂行することができた。そればかりか、ライデン大学の授業や日常生活を通じて、先生方の熱心な指導を受け、心温かい同僚たちと友情を

育むこともできた。これらは、長期滞在ができてこそ得られたものであると実感している。京都大学教育研究振興財団によって、このような機会を与えていただいたことに深く感謝し、心からお礼を申し上げます。